

Title	<書評>比嘉夏子著 『贈与とふるまいの人類学 -- トンガ王国の 経済 実践』京都大学学術出版会、2016年、3,300円 + 税、v + 240頁
Author(s)	深川, 宏樹
Citation	コンタクト・ゾーン = Contact zone (2017), 9(2017): 457-464
Issue Date	2017-12-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/228342
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Contact Zone 2017 書評

比嘉夏子著

『贈与とふるまいの人類学 ——トンガ王国の〈経済〉実践』

京都大学学術出版会、2016年、3,300円＋税、v＋240頁

深川宏樹

本書はオセアニア島嶼国、トンガ王国における贈与という行為を、単なるモノの移譲としてではなく、人びとによる「ふるまい」を通して生起する共同的／協働的なコミュニケーション過程として記述し、考察したものである。ここでの「ふるまい」とは、濃密な人間関係が幾重にも絡み合い、村人相互のまなざしが隙間なく張り巡らされた村落生活において、そのようなまなざしを強く意識して生きる者たちの、行為一般を指す語である。トンガにおいて贈与とは、それ自体ひとつのふるまいでありながら、他の無数のふるまいを誘発し、かつ、それら無数のふるまいを収束させ、その支点となるような、ひとつの磁場である。この贈与を軸に、トンガの村落における広義の〈経済〉実践を貫くローカルの論理を解き明かすことが、本書の目的である。以下が本書の構成である。

457

- 第1章 〈ふるまい〉としての〈贈与〉
- 第2章 トンガの生活世界
- 第3章 モノを〈ふるまう〉——手放すことの意義
- 第4章 貨幣を〈ふるまう〉——宗教贈与の盛大さ
- 第5章 踊りと共に〈ふるまう〉——貨幣と身体
- 第6章 道化として〈ふるまう〉——笑いの創出
- 第7章 所有という〈ふるまい〉の困難さ
- 第8章 〈ふるまい〉とそれを覆う認知環境
- 第9章 〈ふるまい〉に満ちた社会

以下では本書の構成にしたがってその概略を紹介したい。まず第1章では、本研究の位置づけと、分析の視座が示される。人類学の民族誌は質的なデータと量的なデータから成

るが、こと経済人類学や贈与交換論に限っていえば、それは取引されるモノの種類と量、そして取引される社会関係の種類と量（人数）のデータによって構成される。そこからごっそりと抜け落ちてしまうのは、パフォーマンスの次元、本書でいうところのふるまいの次元である。本書で定義されるふるまいとは、トンガ語でアンガと呼ばれる概念に対応するものであり、このアンガ=ふるまいへの着目を通じて、贈与や所有といった人間生活にとって根源的な営みを捉え直すこと、そこに本書の狙いがある。人びとが他者の一挙手一投足に注意を払い、強い関心をむける社会において、贈与や所有は「まなぎしの網の目」（8頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）の中に埋め込まれている。そうした他者のまなぎしを前提とした「対他的なふるまい」（211）として、贈与や所有を記述・分析するためには、従来の贈与論、貨幣論、そして経済人類学には欠けていた、新たな視点が導入されなければならない。

そのひとつが「モノ中心主義的な贈与交換論からの脱却」（28）であり、言い換えると、贈与という「相互行為場面の構成」（23）への視点である。贈与交換とは何らかの規則や因果の法則に従って自動的に進展する機械的なプロセスではない。一見すると何事もなく円滑に進んでいるかにみえる贈与の場は、そこに参与する者たちの意識的・無意識的な所作や言動に支えられている。従来のモノ中心主義的な贈与交換論は、贈与されるモノの種類や性質（e.g. 人格を体現するモノ、交換関係の履歴を刻んだモノ）に焦点を当ててきたが、それでは本書で扱うような、「相互行為秩序が維持・攪乱されるプロセス」（21）を捉えることができない。

これと部分的に重なる第二の要点が、「複数行為者の共在」（18）への視点である。贈与を単発の行為としてではなく、ひとつの場面と捉えたとき、それは当事者二者間のみで完結する事象ではない。そこには「観衆」が存在するのであり、ときに彼ら／彼女らは単に「観る者」であることを止め、贈与という場に身を投じる参与者となる。これら二つの視点が、従来の研究には欠けていた本書独自の分析の視座である。

さらに、相互行為秩序やパフォーマンスの次元で贈与や所有を捉えたとき、必然的に生じるのが本書の第三の要点、贈与経済と市場経済、伝統財と近代貨幣、贈与交換と商品交換といった「伝統と近代」の下位区分を成す二元論の解体である。人類学者による概念の構成ではなく、「膨大なモノがやりとりされ、人びとが集う「場」それ自体の構成」（13）を明らかにする際、このような学術界のカテゴリーは、その障害となることはあっても助けになることは少ないだろう。むしろ必要なのは現地の概念を追うこと、そして何よりも、その「場」を成り立たせている非言語的コミュニケーションを丹念に記述・分析していくことである。そのような記述は、従来の固定的な分類枠を容易に乗り越えることになる。

以上の視座から描かれる第3章以降の〈ふるまい〉の民族誌に先立って、第2章では調査地の概要と調査方法が提示される。調査地はトンガ王国の首都ヌクアロファが位置するトンガタブ島の一村落である。トンガ王国は、王族・貴族・平民から成る（近代国家・憲法の成立により再編成された）階層社会であるが、調査村落には王族と貴族は居住しておらず、本書の対象は平民層の人びとである。生業は農耕を主とし、ブタを飼養し、漁撈も

小規模に営まれる。主食はイモ類であるが、食生活には輸入食品が浸透している。現金は商品作物の栽培にくわえ、海外移住者からの送金、国内の親族からの「不定期的な贈与」(40)などによって得られる。なお、トンガでは、海外移住者が増加傾向にあるなかで、移民と母国の親族との紐帯や生活上の相互の影響は強く、人びとは「移住先や出稼ぎ先として、あるいは親族が暮らす場所として、海外さえも地続きの世界であると捉えているかにみえる」(61)という。宗教はキリスト教、言語はトンガ語である。調査方法としては村落での長期にわたる参与観察にくわえて、特筆すべき点として、キリスト教の集会などを含む相互行為場面のビデオ撮影を行い、映像資料を活用している。

これらの基本事項を確認したうえで、第3章では主に葬儀に伴う贈与儀礼と、キリスト教会行事としての饗宴、それに付随する食物分配が記述・分析される。葬儀の場における相互行為は、概して、親族関係やキリスト教会の関係に基づく地位と役割の体系により構造化されている。しかしその反面、弔問客から遺族に贈与される財(女性が生産するタバ布やゴザ、ブタ、食物など)に対する返礼の局面においては、必ずしもそうした地位・役割体系が支配的な原理として作用するとは限らず、「その場に居あわせる」(88)ことが重視される。すなわち、財を供出したにもかかわらず葬儀に参列せずにその場に居あわせなかった者たちが返礼を受けられないのに対して、その場に居あわせた者たちは贈与した財とほぼ同種・同量の財の返礼を受けることができる。

同様の「場」中心的な傾向は、キリスト教会の饗宴においても異なるかたちで観察されるだけでなく、さらにより日常的な食物の贈与交換にもみられる。通常、贈与交換は、贈与と返礼のタイムラグ、返礼の遅延性による負債の創出を特性とする。しかし、調査村落では、たとえばクリスマスの日の隣人からの食物の贈与などに対しては、即時かつ等価の返礼がなされるという。つまり、ここでの贈与とは、負債の創出により主体間に不均衡な関係を打ち立てる行為であるというよりも、むしろ同じ「場」を共有し、贈与と返礼というふるまいそれ自体を相手の前に差しだし、確認しあう営みであるといえる。

このように、状況依存的かつ即興的に「成立させられる」贈与の特質は、第4章で検討される教会への献金行事の事例により顕著に現れる。この献金行事は宗派別に行われ、親族関係を基盤としたいくつかのグループに分かれて現金を供出するスタイルをとる。注目すべきは、この献金行事が、決して無味乾燥とした現金の受け渡しの形態をとらない点である。それとは正反対に、牧師による祈り、マイクを片手にグループごとの献金額を声高に読み上げる司会者のパフォーマンス、洗面器に硬貨や紙幣を投げ入れさせる集金係の存在、感情の昂りとともに聖歌を合唱する信者たちなど、様々な演出によって、献金行事はひとつの劇的な出来事へと高められている。著者によれば、こうした献金行事は、実は植民地期に貨幣経済を浸透させる意図から宣教師が考案し定着させた制度に端を発するのであるが、人びとの熱狂的な上演は、そこで集められる貨幣の価値には還元できない、ある種の共同性／協働性に下支えされている。

こうした共同性／協働性が、人びとによっては言語化されえない、身体と相互行為のレベルに根をもつことが鮮やかに示されるのが、本書前半部のクライマックスともいえる第5章、寄付金集め＝コニセティの踊りの事例である。トンガでは、何らかの現金の

必要から、教会、村落、学校、家族単位で寄付金集めの行事が不定期的に開かれる。この寄付行事は、少女による踊りを伴う。踊りの最中には、彼女の身体に寄付金となる紙幣が貼りつけられる（踊り手の少女の身体には肌を輝かせるオイルが塗られており、そこに紙幣が貼りつく仕組みとなっている）。この紙幣を貼る行為が、ファカパレである。寄付金は、男性たちによる儀礼的なカヴァ飲みによって集められることもあるが、カヴァ飲みが「座席および身体配置とヒエラルキーの相関性」（126）、すなわち社会構造により規定される側面が強いのに対して、コニセティは男女双方が参与する行事であり、即興性とパフォーマンス性がより前面に出る傾向にあるという。実際の踊りの場で、観衆は誰に指示されるわけでもなく、自発的にステージに上がり、踊り手に紙幣を貼りつける。それにもかかわらず、紙幣の貼りつけはランダムに行われるわけではなく、そこには「明らかな身体的同調性・同期性がみられる」（137）。踊りの映像記録を秒単位で分析したとき、紙幣貼りの行為は特定のタイミング（約1分間ほど）に集中しているのである。

さらに驚くべき事実として、過去の記録によれば、このファカパレという行為は、元来、踊り手の少女の手首に樹皮布や花輪を巻くことで、踊りに対する賞賛の意を表明する行為であったという。つまり、少なくとも踊りの場においては、人びとは現金を、踊り手を飾る花輪や布のように「タンジブル（触れ、感知することのできる）なモノとして用いる」（144）のであり、そこでは交換財としての貨幣の贈与と、装飾品としての貨幣を纏う身体の上演とが、同時に進行しているのである。ただし、言うまでもなく、彼女が纏っているのは、単なる紙幣ではない。それは寄付金を集めた人びとの社会関係を可視化し、その場面を知覚可能・理解可能なものとして構成する実践に埋め込まれたモノであり（141-142）、そうした相互行為秩序は、踊り手の肌に貨幣を貼る者たちの身体的同調性・同期性と、「貨幣の「モノ性」を最大限に引き出している」（144）人びとのふるまいの共同性／協働性により、（意識化された言語ではなく）身体と相互行為のレベルで事実上成立する関係性として維持されているのである。

おそらく第5章と並んで本書の最も独創的な箇所が、次の第6章、贈与の場面における道化の役割をめぐる議論である。第4章と第5章で取り上げた献金行事や寄付行事には、「日常規範からの逸脱行動」（145）により観衆の笑いを誘う「道化的ふるまい」（145）をとる女性が登場することがある。彼女たちは一見すると、その場に不適切な言動をとったり、奇異な出で立ちで現れることで、献金や寄付の場面の秩序を攪乱しているかにみえる。しかし、著者が実際の事例を観察してみると、道化役の女性が参加する行事では、献金や寄付の額が増加する傾向にあったという。したがって、彼女たちの行動は、実のところ「実際の相互行為場面の内部」（160）にあって「既存の価値を支えている」（161）行為であるどころか、むしろ女性が（本来ならばありえない）男性の輪に入ったり、男性と手を取って踊ったりすることを可能にするなど、より広範な共同性／協働性を達成するための媒体の役割を果たしているのである。それによって「人びとは、贈与の場を、積極的かつ多様な参与のしかたによってともに作りあげ、そこから得た達成感をも共有」（162）する状況が生じているのである。

以上の各章が主に財の贈与や供出（とそれに付随する分配）に力点を置いていたのに対して、第7章と第8章では所有へと焦点が移される。ただし、贈与と同様、所有も権利の問題ではなく、一種の相互行為として記述・分析される点に、本書の特徴がある。まず第7章では、人びとの日常的な消費傾向と、それを前提とした村落の貯蓄組合、そして商店経営の事例が記述される。現金であれ食物であれ、村人はそれがたとえ稀にしか入手できない貴重な財であっても、節約などせずに即自的に消費する傾向にある。現金と食物は日常生活に欠かすことができないものであるが、欠乏すれば他世帯を頼って分け与えてもらうことができるため、村落で真に困窮することはない。そうした分かち合いや分配が当然視される状況にあっては、個人的な財の蓄積は、むしろ批判の対象となる。それゆえ、必要な現金の貯蓄も、個人のみによってなされるのではなく、集団あるいは複数人が集まってなされる。そのひとつが、村落の女性たちが参加する貯蓄組合である。

貯蓄組合では、複数人の女性がグループをつくり、毎週現金を持参して集まり、それを積み立てる。現金の積み立て自体は各個人を単位とするが、名義には女性ではなく必ずその子どもの名前が用いられ、その用途も子どもの学費とされる。貯蓄された現金が実際に子どものために使用されるとは限らないが、この制度は「それによって蓄財に対する批判の対象となること、すなわち「自分のため」に財を手元に留めておくということへの批判から、その行為を巧妙にずらしている」（183）。本来ならば、貯蓄は個人のみで完結する行為であり、他者との相互行為を介す必要はない。しかし、個人的な蓄財が批判される状況下、女性たちはあえて貯蓄を複数人との相互行為のただ中に置き、他者の眼前で「適切にふるまう」こととして、貯蓄を遂行＝上演しているのである。こうした社会環境にあって、商店の経営が、多かれ少なかれ批判や妬み（あるいは、自分が利己的な行動をとっているという自覚からくる恥の意識）を生じさせることは想像に難くないだろう。

相互行為のただ中にある所有、というテーマを人びとのまなざしの交錯という観点からさらに突き詰めたのが第8章「〈ふるまい〉とそれを覆う認知環境」である。「島嶼社会や小規模なコミュニティにおいてそうであるように、この村の中でも人びとのまなざしが常に交錯し、各人の一挙手一投足にまで至っている」（192）。この「まなざしの網の目」（194）にあっては、誰がどれほどの財を所持しているかは常に相互監視のもとに置かれており、人びとは他者の所持品についてかなり詳細な知識をもっている。それゆえ、たとえば、ある者が「所有する」かにみえる財も、自他の「相互認知環境」（199）のなかで顕在化した（他者の眼にふれた）途端、すぐさま相手に分配されることになる。なかでも、不動産ではなく動産で、余剰があると知られている財に関しては、「所有」とは、単にそうした相互認知環境下において顕在化していない財、しかしいつ自他のまなざしに晒され分配される運命を辿ってもおかしくない、いわば（単に未だ顕在化していないだけの）潜在的な財の保有に過ぎないのである。

こうした認知環境のもと、村落では、半ば周囲に知られながらも、財を自他のまなざしのうちに顕在化させない様々な工夫がなされている。たとえば、商店で食品を購入する際に、昼間ではなく辺りが闇に包まれる夜を選び、かつ人通りの少ない道を通って運

ぶ。あるいは、(これも夜に) どれほど短距離であっても食物を自動車の中に入れて運ぶ、などがそれにあたる。ただし、これらの行為は、他の村人の眼にふれば利己的な行動として批判され、当事者に恥の意識を喚起させうる。そこで大人たちが頼るのが、財を「所有する」ことがない子どもである。子どもは、財を目に見えるかたちで運びながらも、所有と分配をめぐる相互認知環境下でそれを顕在化させることがない、特異な位置づけをもつ。子どもの事例が逆照射するのは、財を持ちながらも持たない、かのような状態をつくりあげることの社会的重要性である。こうした点は、ブタの飼育形態にも反映されている。具体的には、ブタは囲われずに放し飼いにされ、「粗放的」(206)に飼養される。この飼育形態は、生産性の観点から捉えたとき、そのメリットが少なく理解が困難である。しかし、自らがブタを持ちながらも持たないかのように周囲の人びとに対して見せる「対他的ふるまい」(211)として捉え直したとき、その意味が十全に理解される。

第9章では、以上の民族誌を貫くローカルの概念が再検討されたうえで、そのモデル化がなされる。トンガ語で「あいだ」を意味する語は、「物理的空間を指すと同時に、人と人との「関係」をも示す」(217)。従来の贈与交換論は、贈与者と受贈者の二項間関係、あるいはそうした「二項間関係の総和としての贈与」(219)モデルを前提としたうえで、そこで取引されるモノの種類や性質に焦点を当てるものであった。それに対して、本書で示されたのは、複数の行為者が共在する「あいだ」において、その「あいだ」を満たす身体とふるまいが、贈与を「成り立たせている」(212)とする相互行為場面の構成モデルである。これを所有の観点からみた場合、アーネット・ワイナーに代表される財の譲渡不可能性をめぐる理論(贈与物が贈与者の人格の一部を構成するとする議論)が、財と所有者の強固な紐帯に重きを置くものであったのに対し、本書のモデルは、むしろ「紐帯を切り離す(手放し差しだす)という行為の強調」(221)こそが贈与の場面を成立させる決定的なふるまいであることを主張するものである。

以上みてきたように、本書は贈与や所有といった従来、経済人類学や贈与交換論の枠組みで議論されてきた事象を、ひとつの共同的／協働的なコミュニケーション過程として読み解いていく。その独創性の高さに、評者は感銘を受けた。本書はその序盤から経済人類学や贈与交換論の議論をとうに超えており、推察するに、それこそが著者が自らの対象を〈経済〉実践と、括弧にくくった所以であろう。豊富な事例の数々と生き生きとした生活の叙述にのめり込みながら本書を読み進めていくうちに、現地の情景が眼前に浮かび上がるような感覚を覚えた。

本書の意義はすでに著者によって十分に展開されているため、ここでさらにその意義を述べることは、まさに屋上屋を架すものと言われかねないが、評者なりに1点のみ補足をつけたい。著者はいくつかの箇所、従来の贈与交換論との対比から、本書の贈与の事例(あるいはモデル)が、「相手をそのモノの質や量によって上回り圧倒するような意識」(101)あるいは「競覇性」(163)を特徴とせず、「競合的な雰囲気を出して場を盛り上げながらも、実際はかなり協調的な態度をとっている」(123)ことを強調している(164, 213-214, 222)。これはマルセル・モース以来、贈与交換論が北西海岸インディアン

のポトラッチや、パプアニューギニアのクラ交換など、個人や集団の威信を競う競覇的な儀礼的贈与交換をその理論の基礎として引きずり続けてきたことに対する反省と捉えることができる。そうした傾向は、後にピエール・ブルデューによる贈与交換論への時間概念と戦略概念の導入、それに伴う種々の「資本」の利己的操作及び蓄積モデルの確立により、異なるかたちで助長されてきた（本書で言及されるワイナーも、ブルデューの理論に多くを負っている）。これと並行して、クリス・グレゴリーによって、キリスト教の献金行事までもが競合モデルに絡めとられていった。この贈与交換論の根底にある支配的傾向を相対化する意義を、本書はもっている。

このような相対化の視点は、おそらく、本書が個々の贈与という行為の「成立化」を問うていることに由来している。モースの三つの義務（与える義務、受けとる義務、返す義務）に顕著のように、従来、贈与は社会制度として安定した構造をもって執り行われるか、あるいはブルデューのように個人の戦略が介在すれど、それが意図されれば容易に遂行できる行為として捉えられてきた。問題は贈与を通して、いかに競うかであった。それに対して、本書はそもそも競覇性をもつ贈与であれ、個々の贈与が、その場面に参与する人びとの行為の共同性／協働性によって、ときに危ういバランスを保ちながらもいかに「成立させられるか」を明らかにしている（冷めきって、勝ち負けに何の感慨も覚えず、スマートフォンをいじり続ける人びとによるポトラッチは不可能であろう）。これは問われるべき問いであり、その相互行為秩序の機制を明らかにするのは並大抵のことではない。だが、不思議なことに、経済人類学や贈与交換論では一切、この点は問われてこず、その方法論もまったく確立してこなかった。そうした状況下、著者がほぼ独力でこの問いを立て、贈与場面のビデオ撮影という斬新な手法まで含めた方法論を確立し、民族誌を書き上げるに至ったことに、評者は畏敬の念を禁じ得ない（経済人類学や贈与交換論がなぜそもそもこうした問題意識をもちえなかったかについては、先例や方法論の不在にくわえて、社会秩序の捉え方や人間観と関わるのであろうが、本書評の域を越えるため省略する）。

しかし一方で、このような補足によって、かえって読者が本書のある特質を取り逃がしてしまうことにはなるまいかと危惧を感じてしまう。本書は透徹した理性に貫かれているが、それでいて現地の人びとへの温かいまなざしに満ちている。それは他者を一方的に限定し、我がものとするまなざしとは対照的な視線であり、（フィールドワークにはつきものの戸惑いや笑い話まで含めて）著者と現地の人びととの濃密な身体的交流の次元を、ひとつの回顧録のように柔らかに照らしだしている [cf. 菅原 2015]。良質な民族誌は理論的な含蓄よりも、その厚い記述によって後世に開かれたものとなるが、さらに本書はそのまなざしの質において真に「開かれた」ものとなっている。本書評で触れることができたのは、そのごく一端に過ぎない。オセアニア研究者はもちろんのこと、経済人類学や贈与交換論、貨幣論、所有論、コミュニケーション研究や相互行為論、道化やパフォーマンス研究、そしてキリスト教研究やジェンダー論など、多彩な関心をもつ方々に是非、本書を手にとって頂きたい。

<参考文献>

菅原和孝 2015 「鏡なき社会の対他存在論」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手
触り——フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版、pp.197-209。